

# 生活科

石田 浩子・柳井 裕美

## 1 研究主題との関連について

### (1) 「教科等本来の魅力」について

本校生活科部会が考える生活科本来の魅力は、具体的な体験や活動を通して、対象と繰り返し関わりながら、自分の思いや願いを実現させていく過程にある。その過程の中で、追究する面白さや発見する喜び、対象や友達と関わることの楽しさを味わうことができる。こうした経験を生活科の中で積み重ねていくことで、学びの土台として考える「自ら学ぼうとする意欲」を高め、諸感覚をしっかり働かせて生活をより楽しもうとする児童を育むことができる。

### (2) 「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」について

本校生活科部会では、【自分の思いや願いの実現に向けて追究する面白さを味わい、自ら学ぼうとする児童】の育成を目指している。追究する面白さとは、具体的には、「友達や身近な人々や環境とかわる楽しさ」、「いろいろな物事を発見したり、不思議に思ったことを伝えたり、解決したりできたという喜び」、「なるほど、こうしたらうまくいくんだ。」という気付き、「もっと〇〇したい。」という自分なりの「こだわり」が次々と生まれるわくわく感などが挙げられる。自分の思いや願いの実現に向けて自ら働きかける姿は、自分の学びを次の活動に活かしたり、新たなことに挑戦したりしようとする姿を生み出していくと考えられる。自ら学ぶ力を育成していきたい。

生活科本来の魅力に迫るために、児童の思いや願いを引き出し、児童の表現からその思いをくみ取することを大事にしたいと考えている。これまでに、児童相互の関係性が生まれやすい「遊ぶ活動」に焦点をあて、児童と対象や児童同士の関わりを広げたり深めたりするための単元構成や環境構成、授業展開の要件を探ってきた。昨年度は、児童が追究する面白さを味わう授業づくりに必要な教員の資質能力の具体を探るために、「遊びを創り出す活動」を中心とした単元を開発し実践した。それらの実践から、教員の資質能力を、以下の表にまとめた。

資質能力	教科等が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	<ul style="list-style-type: none"><li>・児童一人一人の経験や関心を踏まえつつ、成長する児童の姿を具体的に想像し、記述する力</li><li>・児童、学校、家庭、地域の実態にあった身近な事象を設定する力</li><li>・多様な活動や繰り返しが可能となるよう、やわらかな単元構成</li><li>・児童同士の関わりを生む素材を見極める力</li></ul>
授業実践力	<ul style="list-style-type: none"><li>・環境構成（板書等を含む）に関する技術</li><li>・直接的な関わりとしての話し方や言葉かけ、表情に関する技術</li><li>・児童の姿や記述を受け止め、価値づけて返していく技術</li><li>・共通素材との出会いの場の工夫</li><li>・遊び方に着目できるような導入の工夫</li><li>・多様な人々と遊ぶ場の設定</li></ul>
授業分析・評価力	<ul style="list-style-type: none"><li>・児童の姿、児童が表現したものなどを通して、授業の次回以降の展開を調整したり、自分自身の児童理解の力を伸ばしたりする力</li><li>・児童の思いや願いに沿って単元計画を修正する力</li></ul>

## 2 本年度の研究計画

### (1) 研究の目的

昨年度明らかにした児童が追究する面白さを味わう授業に必要な教員の資質・能力の具体の一端について、逆向き設計論を取り入れた授業作りを行うことにより、児童の変容を根拠に、生活科の魅力に迫るための教員の資質能力の妥当性を吟味する。

### (2) 研究の方法

「学校生活に関わる活動」を中心とした単元を開発し実践する。第1学年で、学校探検の学習活動を展開し、これまでと同様、以下に示す3つの視点を意識した授業づくりを行っていく。

- 児童が繰り返し対象と関わることができる単元構成
- 児童と対象，児童同士の関わりが生まれやすい場づくり
- 児童が自らの気づきを振り返ったり，互いの気づきを交流したりする活動の場における環境としての（学びを豊かにするための）教師の言葉や働きかけ

#### [児童が繰り返し対象と関わることができる単元構成]

子どもたちの「こだわり」に合わせた弾力的な展開や対象と繰り返し関わることができるよう、いろいろな内容との関連を図り、総合的に取り扱う単元構成とする。ここで言う繰り返しには、長期的に活動そのものを繰り返す「大きな繰り返し」と、活動中における課題発見と課題解決のプロセスを繰り返す「小さな繰り返し」とがある。その繰り返しの中で、友達と一緒に追究する面白さを味わえるような活動も意図的に仕組むことができる。例えば、内容(1)「学校と生活」や(3)「地域と生活」を、(5)「季節の変化と生活」、(8)「生活や出来事の伝え合い」、(9)「自分の成長」のいろいろな内容と総合的に扱い、「がっこうたんけん」や「町たんけん」を半年から1年貫く単元構成とすることである。

#### [児童と対象，児童同士の関わりが生まれやすい場づくり]

「活動形態」「物」「場所」「時間」の4点をポイントに考える。「活動形態」では、個人の活動にするのか、グループでの活動にするのかは、その活動の目的に応じて決めていく。これまでの取り組みから、作る活動において、グループ別で活動を行うとグループ内での自然な関わり合いを生み、情報交換や新たな課題発見、課題解決につながり、活動の活性化に繋がることが明らかになっている。(広島大学附属東雲小学校 2022, 2023)「物」では、準備物や道具など、その目的に応じて数や物を決めていく。「場所」では、児童が調べたことをじっくりと伝えることができるように、広い場所を確保する。「時間」では、追究する面白さを味わうことができるように、調べたり伝えたりする時間を十分に確保する。

#### [児童が自らの気づきを振り返ったり，互いの気づきを交流したりする活動の場における環境としての（学びを豊かにするための）教師の言葉や働きかけ]

環境構成の一つとして、教師の言葉や働きかけを予め準備検討し、授業に臨む。児童がいろいろな事象に出会う中で見つけたり、感じたりした、一人一人の「!」「?」(面白さ、楽しさ、不思議さ)を肯定的に受け止め、共感し、価値付けたりする。意図的に取り上げたりするのはもちろんのこと、「どうしたらそんな風になったのかな。」「前と違うってどういうことかな。」など比較を促すような言葉がけや「本当にそんなのかな。」など流れを意図的に止め、児童がはっとするような言葉や働きかけを行う。流れが止まったとき、児童の中に生じる新たな「?」を乗り越えていくところに学びの深まりが出てくると考える。また、「○○くんのお悩みはどうしたらいいのかな。」など友達の思いを考えるきっかけをも

つことができるような発問も行う。そして、次の段階として、教師による言葉や働きかけだけに頼るのではなく、児童同士のやり取りの中で気付きの交流や深まりができるようになることを目指す。

### (3) 検証の方法

児童が学校の施設の様子や学校生活を支えている人々との関わりについて、どのような気づき生まれ、それらがみんなのためや安全な学校生活のためにあることの意味を見いだすことにつながったのか、ワークシートの記述内容や児童の姿から、思いや変容を見取る。さらに、そのきっかけとなった教師の働きかけを整理、分析する。

### 【引用・参考文献】

朝倉淳編 (2018), 『平成 29 年改訂 小学校教育課程実践講座 生活』, ぎょうせい.

朝倉淳・永田忠道共編著(2019), 『新しい生活科教育の創造－体験を通じた資質・能力の 育成－』, 学術図書出版社.

田村学編 (2017), 『新学習指導要領の展開 生活編』, 明治図書.

田村学 (2019), 『深い学び』, 東洋館出版社.

奈須正裕 (1999), 『総合的学習を指導できる教師の力量』, 明治図書.

西岡加名恵 (2008), 『「逆引き設計」で確かな学力を保障する』, 明治図書.

広島大学附属東雲小学校 (2022), 『令和三年度教育研究初等教育』

広島大学附属東雲小学校 (2023), 『令和四年度教育研究初等教育』

文部科学省 (2018), 『小学校学習指導要領解説 生活編』, 東洋館出版社.

無藤隆 (2018), 『幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿』, 東洋館出版社.